2019/03/21　Masako Seino

第 16 章　静慮の波羅蜜（226 ページ 12 行目～228 ページ 11 行目）

前回までの復習

「心身二つが空寂なので、散動が生起しないのです。散動がないので、静慮に入るのです・それから、自己の心を修治すべきです。それもまた、自己は煩悩のどの部分が大であるかを観察し、それの対治を思惟すべきです。

それもまた、

1）　貪欲の対治は、不浄を修習することです。
2）　瞋恚の対治は、慈しみを修習することです。
3）　愚癡の対治は、縁起を修習することです。←本日はここです。
4）　嫉妬の対治は、自他の平等を修習することです。
5）　慢の対治は、自他の交換をすることです。
6）　煩悩が等分に粗大である、または分別（尋思）が多いなら、風（呼吸）を修習するのです。（本文 p 224～225）

輪廻の縁起

第一にもまた二つ、〔すなわち〕(訳註 29)
1）　外の縁起と、
2）　内の縁起です。

a）The first has two topics: interdependence of the exterior and interdependence of the interior.

縁起には一般的縁起（外縁起）と価値的縁起（内縁起）の二つがある。仏教で必要なものは価値的縁起であるが、その基礎として、またはそれを譬喩的に説明するものとして、一般的縁起（縁起一般）が説かれる。「これあればかれあり、これ生ずるが故にかれ生ず、これなければかれなし、これ滅するが故にかれ滅す」の語句は外縁起を説いたものである。（水野弘元「仏教要語の基礎知識 p 160）

〔内の縁起――〕これについてもまた二つ、〔すなわち〕(訳註 30)
1）内の縁起は因を有することと、　←本日はこの部分について学びます
2）内の縁起は縁と関係することです。

Interdependence of the interior has two topics:
interdependence with cause and　interdependence supported by conditions.

因　結果を引き起こすもとになるたね。原因をなすもの。（仏教語大辞典）

縁　広義には結果を引き起こす因のこと。教義には、結果を引き起こす直接の内的な条件（因）に対して、それを外から助ける外的な条件をいう。（仏教語大辞典）

そのうち。第一〔：内の縁起は因を有すること〕は、〔『稲芋経』に〕(訳註 31)「比丘たちよ、これが有るので、これが起こる。これが生じたので、これが生ずる。すなわち、無明の縁により諸行から、〔識、名色、六処、触、受、渇愛、取、有、生、そして〕生の縁により老死と、憂いと嘆きと苦しみと悶えと悩みが生起することになる。そのようならば、この大きな苦の蘊のみが生起することになる。」と説かれています。

(1) The first one, interior interdependence with cause. As is said:
Monks, because of this, that is produced. Because this is produced, that is born. This way, by the condition of ignorance, mental formations arise. By the condition of birth, there occur old age, death, sorrow, lamentation, suffering, unhappiness, and distress. Therefore, in this way, this vast aggregate of suffering appears.

縁起支のもっとも代表的のものとして後代にまで伝えられているのは十二支からなる**十二縁起**である。

十二縁起の経文　：「比丘らよ、縁起とはなんであるか。比丘らよ、無明の縁から行があり、行の縁から識があり、識の縁から名色（みょうしき）があり、名色の縁から六処があり、六処の縁から触（そく）があり、触の縁から受があり、受の縁から愛があり、愛の縁から取（しゅ）、取の縁から有があり、有の縁から生があり、生の縁から老死、愁悲苦憂悩が生ず。このようにこの一切の苦蘊（苦のあつまり）の集起がある。比丘らよ、これが起といわれる。」（水野弘元「仏教要語の基礎知識」P167）

↓以下十二縁起について詳しく述べられています。

それもまた、これは界に関しては、〔三界のうち〕欲界においてです。生処に関しては、〔四生処のうち〕胎児においてです。

This is explained according to the desire realm and according to birth from a mother's womb.

三界　仏教の世界観で、生死流転する迷いの世界を 3 つに分類したもの。欲界・色界・無色界　（仏教語大辞典）

欲界　淫欲・食欲の二欲を有するものの住む世界で、三界中最下に属し、地獄・餓鬼など六道ある　（仏教語大辞典）

生処　（しょうしょ）来世に生まれていくところ。死後、再び生を受けるところ。

（仏教語大辞典）

四生　生物をその生まれ方から四種に分類したもの。胎生（母胎からうまれる人や獣など）、卵生（卵からうまれる鳥など）、湿気（湿気からうまれる虫類）、化生（他によってうまれるのでなく、みずからの業力で忽然と生ずる、天・地獄・中有などの衆生）の四種のうまれかた。（仏教用語の大辞典）

伝統的な三世両重の因果による十二支の説明は、（水野弘元「仏教要語の基礎知識」P169）

(1)　無明は過去における無明などの煩悩
(2)　行は過去における善悪業
(3)　識は母胎内に最初に発生する一刹那の五蘊
(4)　名色は胎内五位（胎内４週まで）
(5)　六処は胎内五位において母胎内で眼等の諸根が完成する位
(6)　触は出胎後単純な触（認識）作用を起こす位
(7)　受は五～六歳から十三～四歳までの単純な苦楽の感受作用を起こす位
(8)　愛は財産や愛欲に貪著する十四～五歳以後
(9)　取は前の貪著が増長する位
(10)　有は愛欲・取著の善悪業が習慣力となって来生の果を惹き起こそうとする位
(11)　生は未来の果を生じた位
(12)　老死は未来に受生後に名色・六処・触・受と発生する位、とされる。

それもまた、最初に〔知られるべきもの・〕所知について迷妄である〔無明〕というものが成就したのです。それが発起させて、有漏の業――善または不善または不明瞭なもの――を造作するの〔・諸行〕です。それを「無明の縁により行」というのです。

(a) At the very first, there is ignorance, which is the confusion that misunderstands all knowledge.

(b) Under the influence of ignorance is created the mental formation of the karma of afflicted virtues and nonvirtues. This is called “mental formation conditioned by ignorance.”

無明　ignorance　仏教の根本思想としての世界観や人生観に通じないこと。無知であって、四諦や縁起の道理を知らないこと。無明の反対は、八正道中の正見である。（「仏教要語の基礎知識」 p 171）

有漏　煩悩のあること。煩悩にまみれていること。（仏教語大辞典）

行　mental formation　十二因縁の一つで、善悪のいっさいの行為をいう

（仏教語大辞典）

その業の種子を修習する心は、「行の縁により識」というのです。業の力により、心を顛倒させてから、母の胎に結生して、疱（kalala）などになるのです。それを「識の縁により名と色」というのです。

(c) The seed of that karma is carried by the mind so that is called "consciousness conditioned by mental formation".

(d) By the power of that karma, the mind is fully confused, enters into a mother's womb, and an embryo and so forth arise. This is called "name and form conditioned by consciousness,"

識　consciousness　十二因縁の一つ。前世の煩悩の所業を種因として生じ、現在の母胎に託する刹那の意識。　（仏教語大辞典）

疱　embryo　胎芽（たいが）人間の場合受精後 8 週間未満の生体；それ以後を胎児という。（ジーニアス英和辞典）

名と色　name and form　十二因縁の四位。心的なものと物的なものとの集合体。個体的な存在をなす五蘊（色・受・想・行・識）の総称。　（仏教語大辞典）

名と色それこそが増長するので、眼と耳〔・鼻・舌・身・意〕などの諸根が完成するのです。それを「名と色と縁により六処」というのです。

(e)By developing the name and form, all the senses of the eye, ear, and so forth are completed. That is called the "six increasing fields conditioned by name and form."

六処　six increasing fields　十二因縁の一つ。眼・耳・鼻・舌・身・意（六根）の六つの精神活動がおこる、対象をとらえる場。　（仏教語大辞典）

眼などの根と対境と識との三つが和合してから受用したなら、「六処の縁により触」というのです。

(e) The interaction～との相互作用　of the eye organ and so forth, the corresponding object, and the consciousness is called "contact conditioned by the six increasing fields."

対境　the corresponding object 六根に対応するもの？六境？

触そく　contact　十二因縁の一つ。二、三歳のころの幼児の、六根・六境（六識が六根を介して認識する六つの対象。色境（色・形）声境（言語・音声）香境（香り）・味境（あじ）・触境（堅さ・湿りけ・温かさなど）・法境（意識の対象となるもの一切、または、上の五境を除いた残りをいう）・六識（六根をよりどころとする六種の認識の作用。すなわち、眼識・鼻識・舌識・身識・意識の総称）の和合はあるが、まだ苦楽の差別をはっきり知らない位をいう。　（仏教語大辞典）

触が生起したそのとおりに、楽または苦または〔非楽非苦の〕捨として領納する受が、生起するのです。それを「触の縁により受」というのです。

(g)Through contact, one experiences the feelings of joy, suffering, or indifference. That is called “feeling conditioned by contact.”

受　feeling　十二因縁のひとつ。幼少年期の、苦楽などを感受する位をいう。

（仏教語大辞典）

五蘊中の受と同じく、苦楽等の感受であって、眼触所生の受ないし意触所生の受の六受であり、また六受は苦・楽・不苦不楽の三受となる。これは認識（触）の後に生ずる苦楽などの感受であって、同一物を認識しても、貪欲者は楽と感じ、瞋恚者は苦と感じるような差がある。これは認識主観としての識が白紙のものでなく、過去の無明や行によって貪欲や瞋恚などの性格を含んでいるからである。（「仏教要語の基礎知識」 p 172）

受の領納に喜ぶことと、こだわることと、特にこだわることを、「受の縁により渇愛」というのです。

(h)When there is feeling, there is joy, attachment, and stronger attachment. That is called “craving conditioned by feeling.”

渇愛　craving　ものを貪り執着すること。欲愛（性欲）・有愛（生存欲）・無有愛（生存を否定する欲）の三愛、欲受・色受（物に対する欲）・無色受（物質を超えた欲望）の三受、あるいは色・声・香・味・触・法の六境に対する六受などの欲望。十二因縁の中の愛はこのような愛。仏教では、慈悲が中心で、愛は憎しみを生ずるものと捉え、愁いや怖れを生ずると説く。個人的な自己中心的なもので、それが友情となり恋愛となり性愛となり渇愛となって、人間の愛の本体としての生のいとなみがおこなわれると解する。（仏教語大辞典）

そのように、こだわるものに離れないように！といって棄てないし、再び希求することを「渇愛の縁により取」というのです。

(i)From that attachment, one craves more and more, and wishes to not be separated from the object of attachment. That is called “grasping conditioned by craving.”

取　grasping　欲取・見取・戒禁取（かいごんしゅ）・我語取の四取とされている。

前の愛は心中に生じるはげしい愛憎の念とされたが、この取は念の後に生ずる取捨のあとの実際行動である。愛するものはこれを奪い取り、憎むものはこれを払い捨て、または殺傷するというような実際行動を指す。つまり身語による取捨選択の行為が取である。殺生・偸盗・邪淫や妄語・悪口・綺語などの身語業はこの中に入ると見られる。（「仏教要語の基礎知識」 p 172）

そのように希求するなら、〔後の生存・〕後有を生じさせる業を身語意により発起させるそれを、「取の縁により有」というのです。

(j)Through that grasping, karma and existence by body, speech, and mind are again created. That is called "existence conditioned by grasping."

有　existence　存在すること。また、有情としての存在、その存在の仕方、生存などの意。(仏教語大辞典)

その業から生じた五蘊が成立したことそれを、「有の縁により生」というのです。

(k)That karma creates the five aggregates 集合体 (Skt.*skandas*). That is called " birth conditioned by existence."

五蘊　the five aggregates　色（物質）・受（印象・感覚）・想（知覚・表象）・行（意志などの心作用）・識（心）の五つをいい、総じて有情の物心両面にわたり。因縁によって生じる有為法をいう。(仏教語大辞典)

生　birth　有情がある有情の部類に生まれることでもあれば、日常生活において、ある経験が生ずることでもある。前者の場合はその有情の過去の全経験の余力としての知能・性格・体質などを担って生まれることになる。各個人がそれぞれ一定した素質をもって生まれるのはそのためである。後者の場合はその人の素質（有）を基礎として新しい経験が生ずることである。
いずれの場合にも有という素質から新しい生が発生することは同じである。
(「仏教要語の基礎知識」 p 173)

生じてから現成した蘊が増長するし、成熟する〔すなわち〕老いる[訳註 32]、そして滅する〔すなわち〕死ぬのです。「生の縁により老死」というのです。

(l)After birth, the aggregates which actually exist increase, ripen, and cease. "Ripen" means aging; "cease" means death. That is called "aging and death conditioned by birth."

老死　aging and death　縁起経では老死の後に愁・悲・苦・憂・悩が加えられている。これは生の後に老死などの苦が生ずることであって、一切の苦悩が老死によって代表される。
　つまり無明・行や（渇）愛・取・有などの誤った考えや行為によって、かならず苦悩を受けるものであり、三界輪廻のあらゆる苦悩は無明や渇愛などの煩悩や行・取・有などの業を原因とし条件とするものであることを具体的に説いたものが、十二縁起をはじめとする種々の縁起説である。(「仏教要語の基礎知識」 p 174)

四苦八苦　：根本的は苦が「生老病死」の**四苦**。それに加え、「愛別離苦… 愛する者と別離す

ること」「怨憎会苦… 怨み憎んでいる者に会うこと」「求不得苦 … 求める物が得られないこと」「五蘊盛苦（ごうんじょうく） … 五蘊（人間の肉体と精神）が思うがままにならないこと」の四つの苦を合わせて**八苦**と呼ぶ。